

在日外国人と国際コミュニティについての一考察[※]

—日本人ボランティアと外国人—

原 田 壽 子^{※※}

1 はじめに

アメリカは多人種、多民族の国で、非白人の割合は2000年には3人に1人に、2030年には全米で過半数に達すると予想されている。このことはアメリカには多くの文化が存在し、多人種が共生する社会であるということがいえる。多民族で構成されている国はアメリカだけではない。ヨーロッパでも大抵の国は複数の民族で構成されているといえる。日本の現状について加藤氏は、「日本に滞在する外国人の数は総人口の1%ほどに過ぎない。この割合から考えると人種的な違いは日本人の中にはないといえるであろう。言葉の違いは異なった文化であるから日本が異文化を受け入れ、共生という社会に実現を目指していこうとする傾向が強いのは自然の流れである。」と述べている。(注：加藤孝次・異文化間教育学会会長・異文化間教育学会創立20周年記念シンポジウム・基調講演)

日本が高齢社会に急激に進む中で、日本に入国する外国人は不足するであろう介護の担い手として、また生産人口の減少から労働力を補うために労働者として必ず必要とすると指摘する人は多いが、この人口の移動が必ずしもこの状況を改善することに通じるかどうかは未知である。日本の社会が外国人を自然な状態で受け入れ、共生社会を作り上げる移民政策が今後の大きな課題であり、これらの問題は大きく変化していくであろう。こういう動きとは別に外国人に対する排他的な考え方もあり、日本社会がどのように外国人を受け入れていくかがこれからの重要な課題である。これからはますます多くの外国人が種々の目的で入国してくるであろう。

このような国際化傾向の状況の中で、国際交流に対する関心が高まり、種々の活動に参加している人が増加している。国、県、市町村の国際交流の部局、あるいは民間ボランティア団体がいろいろな形で異文化共生社会をつくることを目指して努力がなされている。この国際交流を目的として日本人側が企画し、実施している四季のパーティ、お祭りや小旅行などの様々な

※A Study of Foreign Residents and The International Community —Japanese Volunteer and Foreigner—

※※Toshiko HARADA

キーワード：国際交流、交流ボランティア、母国文化・言語、友人数と日本理解

行事や日本語教室、料理教室などの勉強会、その他支援活動は日本に滞在している外国人にはどのように受け止められているのであろうか。また、在留外国人の生活実態、在留意識はどのようなものであるのか。外国人を受け入れる日本人と日本側からの支援や交流活動を受ける外国人の両者を対象に質問票による調査からみることとした。今回は特に外国人については留学生を調査の対象としている。

2 日本に在留する外国人の実態

全国の総人口に対する外国人登録者の割合は現在、1.1%で141万人である。東京都の場合、1980年には11万4000人であったが1996年には26万2000人となり、東京都の総人口の2.2%を占め全国の場合の2倍である。一方、「都民の生活意識と生活行動調査」（1996年）によると地域に住んでいる外国人との交流経験があるという日本人は約2割である。この場合の交流内容は「会えば挨拶をする」が8割近く、「時々会って話しをする」が4割である。「困ったときに相談を受ける」「家に招いてお茶を飲む」「いっしょにレジャーを楽しむ」などの積極的な交流をしている人は1割ほどである。地域の外国人との交流の経験がない人でも今後、交流をしたいという意味をもっており、とくに20歳代、30歳代の女性では7割を超えている。日本人で海外での生活経験のある人の交流への意思は海外生活の経験のない人より高い。特別に交流活動のグループに所属せず、個々の立場で外国人との交流を図る傾向がうまれていることは異文化共生の社会への発展につながるものである。

1983年に中曽根首相により「留学生10万人政策」が発表され、留学生数はこの年、1万人であったが、1987年には2万人、1990年にはさらに増加して4万人を超えている。この時期の日本はバブル経済状態にあり、経済上の需要ニーズが高く、その供給として留学生だけではなく、不法労働者を含む大量の外国人労働者が入国している。留学生を含む外国人の増加とともに「国際化」という言葉が流行し、各市町村に至るまで国際交流に関する意識が盛り上がり、各地域でこれらの外国人への支援と支援活動者として外国人に関わる人が増加したが、多数の日本人が外国人への関心がこれと同様に高揚したかどうかは不明である。とくに日本人学生の留学生に対する関心をみると、留学生に関心をもつことは少ない。これは日本人学生は大学に対し個人単位で存在し、主体的にコミュニティ形成に関わる意識が希薄であり、留学生に関心をもつことも少なく、留学生の方も勉強や研究主体の生活になり、日本人学生との関わりをなかなか持てないのが現実のようである。今回の調査でも日本人の友人数が少なく、日本そのものを知る機会がなかなかないという人がいる。奨学金や宿舎の問題だけでなく、人間関係など質的問題として深く取り組むことが必要となっているのではないだろうか。留学生の日本での生活意識の向上は主体的には大学における日本人学生の交流を通してでてくることが多いものとする。

世界教育会議が2000年4月に開催され、世界の留学生を現在の2倍にすること、倫理観や市

民観を育てていくことを議長宣言し、日本もこれに参加している。留学先での生活が彼らの学業をさらに充実したものにするためにあらゆる努力をしていかなければならないときである。日本の大学・大学院の在学者は現在5万6000人、文部省はこれを向こう10年間に倍増させる新たな受け入れ政策を2000年9月に決定し高等教育の国際化を目指している。アジアの留学希望者が欧米よりも日本の高等教育を受けたいと感じるように、教育プログラムの改革を進めるといふ。こうして増加する留学生がいかに日本での生活や勉学に馴染んで日本に親しみ、本当に日本に留学したことに満足し、これを母国の発展に寄与していくかがこれからの重要な課題である。

1990年の「出入国管理および難民認定法」の改正後、南米日系人を中心に急激にブラジル人、ペルー人をはじめ入国者が増加している。外国からの単純労働者を受け入れないという従来からの方針を堅持しながら日系人に対する門戸開放を実施し、民族的同質性、日本人の民族や文化を維持するという政策をとることになった。しかし、実際の入国者は中国、韓国、台湾などがほとんどを占めている。この入管法改正にともなって入国している日系二世など外国人は労働不足の日本において労働者として地域産業を支える大きな力になっている。彼らは労働者であり、同時に日本に滞在し教育を受けている市民でもある。行政、教育制度、地域社会の仕組みやあり方を問い直すことが必要になり、外国人市民のための政策転換や充実をはかることが急務となり、日系二世を受け入れた各地で種々の方策を構築し実施している。

在留する外国人を対象に東京都では「外国人都民会議」を、その他川崎市などでも同様の会議を開催し、在留外国人の人権、国際理解教育、健康、教育、地域政治への参画の意識づくりなどをテーマに話し合いが進められている。また、外国人の生活実態調査は各地できめ細かく実施され、外国人の日本での生活状況の把握につとめている。浜松市は2000年3月「外国人の生活実態意識調査——南米日系人を中心に——」の報告書をまとめている。浜松市には人口の3%にあたる1万7000人を超えるブラジル人、ペルー人など日系人が在留し、地域産業を支える大きな力となっている。かれらは浜松市民として生活していることから行政や教育制度、地域社会の仕組みなどについて政策の充実を図ってきた。滞在期間の長期化が進み、「家族で滞在し、日本に腰を落ち着ける中堅世代」が増加している傾向にある。将来の計画については「2—3年のうちに帰国予定」「母国の状況をみて帰国したい」あわせて35.8%、いつか母国に帰ることを前提としているが結果として長期滞在になっている。日本での生活に対する満足度は高いが、医療、教育が当面の課題となっている。地域産業を支える労働者という在留目的ははっきりし公的な対応がとられている都市に滞在する場合、国際コミュニティは外国人の方向をみて形成されていくが、いろいろな国から、種々の目的で滞在する人が集まる都市の場合にはこれは難しい。

新宿、大久保、池袋などには日本語学校が集中し、多くの中国人、韓国人の就学生や留学生が滞在し、地元がいかに馴染んで生活するかを在留者、日本人の両者と区役所、民間ボランティア団体などにより協議が進み、区報、ごみ集積所、公衆電話などの表示が日本語以外の言語で

なされて久しい。ここでみている正規滞在者の他に非正規滞在者も多数滞在中。法務省の発表によると1999年7月現在、26万8421人の超過滞在者がいる。出身国は多い順にあげると韓国、フィリピン、中国で各国とも10%以上を占めている。これらの人の定住化が進み、滞り期間が3年を超える人は1998年45.6%、半数に近い。この滞り期間にはさらに伸び、長期化の傾向にある。超過滞在者27万人の労働者が日本に貢献していることになる。様々な公共サービスから排除され、劣悪な労働環境であり、その生活基盤は軟弱で安定しない場合が多い中で、滞り期間の長期化が進むのは国際結婚の増加、家族の呼び寄せなどである。日本での生活基盤をそれなりに築き、日本に馴染み、社会経済的に快適であるということであろうか

3 在日外国人に聞く日本での生活についての調査と結果

総人口の1%の存在である外国人を受け入れる対応を模索している現在、県や市町村では種々の調査を通して外国人の要望や不満を聞いているが、ここではとくに外国人留学生の生活実態や在留意識はどのようなものか、日本人が種々の活動内容を発信している国際交流の活動とはどんな内容であり、それは外国人にどのように受け止められているかを、また、外国人が本当に望む交流活動とはなにかを特に留学生、就学生を対象にみることにした。また、市町村では国際交流に関係する部署、国際交流協会が中心になり、その町に住む外国人を対象に各種の行事を開催し、市民との交流の場を設けている。また、国際交流を目的とした民間の団体が各地に草の根的活動を展開している。日本人側から提供される交流パーティ、お祭り、料理教室、ハイキング、小旅行などまたは日本での日常生活についての支援活動に実際に携わっている人々の外国人に対する意識調査とそれを受ける外国人の意識調査をあわせて実施した。また、両者の自由記述の内容からそれぞれに求めているものを推察することとした。

調査の内容と結果

「日本に在住の外国人の皆さんに日本の生活についてお聞きします」というテーマで質問をしている。調査は平成12年1月から3月に実施した。

1 調査対象：

男性：113名、女性：130名 計 243名

20代：67.08%、30代：19.8%、40代：10.7%、50代：2.47%

2 住まいの地域

東京：67.9%、埼玉：23.9%

3 出身国

中国：43.62%、韓国：32.1%、台湾：5.76%、タイ：0.82%、フィリピン：0.82%、
ブラジル：13.8%、ペルー：1.23%

4 来日の目的

男性＝就学：74.4% 就労：18.8% 結婚：1.75% その他：5.1%

女性＝就学：53.6% 就労：15.2% 結婚：13.6% その他：17.4%

5 在日年数

1年未満：6.75% 2年未満：28.0% 3年未満：11.9% 4年未満：9.47%
5年未満：7.82% 5年以上：16.0%

6 職業

学生：39.4% 就学生：19.3% 常勤者：14.2% 家事専業：12.2% 自営業：3.1%
語学教師：3.1%

7 日本語はどこで習得しましたか

日本の日本語学校：35.9% 現在日本語学校で習得中：23.3%
母国である程度習得：17.9% 独学：12.2% 母国で十分習得：10.69%

8 日常的日本人と交流がありますか

よくある：43.2% 時々：39.5% あまりない：14.4% 全くない：1.23%

9 日本人の友人数

1－5人：40.1% 10人：26.9% 20人：15.2% 21人－：14.2%

10 友人はどこで知り合いましたか

職場：26.2% 学校：23.7% 友人のまた友人：21.6%
国際交流の行事で：13.6% となり近所：7.8% 教会で：5.8%

11 日本が好きですか

とても好き：18.11% まあ好き：39.2% ふつう：35.39%
あまり好きでない：10.29% 好きでない：2.46%

12 日本での生活はいかがですか

日本にきてよかった：23.87% まあよかった：53.5% あまりよくない：18.93%
とてもよくない：2.05%

13 日本と日本人になにを期待していますか

話し相手：48.26% 仕事探し：13.51% 住まい探し：13.3%
保育所えらび：0.77% なし：6.18%

14 日本人にして欲しくないこと

じろじろ見ること：26.57% 貯金ができたでしようといわれること：19.93%
外国人とみれば英語で話し掛けること：12.55% 英語はだめーと逃げる：7.38%

15 母国の文化・文化についてどう考えるか

日本と母国といずれも大切：66.8% 母国の文化が大切：19.53%
日本の文化に馴染んで同化：5.07%

16 国際交流の催しに参加したことがありますか

ある：57.55% ない：37.55%

17 参加内容

交流パーティ：35.4% お祭り：26.9% スポーツ：16.5% シンポジウム：13.2%
弁論大会：55.2%

18 今後も参加したいですか

参加したい：52.3% 内容によって参加：31.3% 参加しない：2.88%

19 自由記述の内容

「あなたは日本が好きですか」

- ・人間関係が複雑ではない，自由
- ・日本というより日本の政治家が嫌い
- ・特に悪いイメージがなかった
- ・好きでも嫌いでもない
- ・別に悪いとは思わない
- ・ここで生活するからには好きにならないとおかしい
- ・物価は高いが安定している治安がいい
- ・自分の故郷より進歩している
- ・日本人は礼儀正しい
- ・しっかりとした国である
- ・言葉で表せない
- ・母国とあまり変わらない
- ・物は豊富，精神的には貧しい
- ・日本にくるのが夢だった

「あなたの日本での生活はいかがですか」

- ・便利
- ・奨学金があり勉強できるし，友人もいる
- ・生活はあまりよくないが，いい体験をしている
- ・生活費，学費が高い
- ・得がたい体験
- ・余り不便なことはない
- ・日本にきて祖国を客観的にみることができた
- ・生活面で困ったことはない
- ・希望の大学に入学できた
- ・大学の勉強が楽しい
- ・他の国の人と触れ合い，視野が広まった
- ・たくさんの大事な友人ができた。
- ・割に住みやすい
- ・生活は母国とほとんど同じ

- ・母国と比べて格差がある
- ・懐かしい人と会いたい
- ・判断するだけの知識がない
- ・アルバイト先の日本人がきつすぎる
- ・宗教・習慣が違う

「あなたは日本と日本人にどんなことを期待していますか」

- ・もうちょっと積極的に国際交流をして欲しい
- ・日本人と同じに扱って欲しい
- ・心と心の交流ができる人になって欲しい

「あなたが日本人にして欲しくない事」

- ・遠慮すること
- ・外国人をなめないで
- ・アジアとくに中国出身者と仲良くする
- ・お金のためにだけに日本に来るのでしょうと失礼に聞くこと

「母国の言葉・文化についてどのように考えますか」

- ・母国の文化を大切にして、日本の良いところは受け入れる

「国際の交流の催しに参加したことがありますか」

- ・チャンスがなかった
- ・情報がない
- ・時間がない
- ・時間が合わない
- ・個人的に付き合っているから催しに参加する必要がある

「今、一番困っていることはなんですか」

- ・私立大学の学費が高すぎ、勉強の時間を奪っている
- ・勉強
- ・物価高で生活に困ってもアルバイトが見つからない
- ・外国人を区別しないで雇って欲しい
- ・言語力不足

結果の内容と分析

調査の対象者の大半は20代で在日年数が3年未満、来日の目的は就学がほとんどの人たちで学生または就学生である。日本語を不自由ない程度に理解できる人たちでもある。回答者のほとんどは東京と埼玉に住んでいる。出身国は中国と韓国で7割を超えている。来日の目標は就学が男性は7割、女性5割、来日後の状況は学生と就学生をあわせると約6割である。日本人との交流は日本での生活を豊かにする要素の1つである。「交流がよくある」「時々」をあわせると約8割であり、日本人との交流があるというのが日本人の友人数は5人以内が4割を占め、

交流はあるが友人の域までは達していないということである。これは日本人側で交流経験があるという人の交流内容が「会えば挨拶をする」が8割であったことからみても、交流はあるが隣人以上のものではないということである。

日本人に期待していることは「話し相手」としてが約5割で日本に在留するとき期待する事項としては当然であろう。話し相手を求めている割合が大きいにも関わらず、友人数が少ないことをみるとこの期待は充足できない状態にあることになり充足されないままに日本に滞在することになる。社会人として在留していない留学生は居住地域の日本人との密接なつながりはあまりなく、隣近所の人と親しくしたいという交流を求めても挨拶程度で、「時々会って話をする」人は4割いるがまだまだ在留者の希望に答えていないようである。「日本の習慣を教えてもらいたい」という要望は今回の調査ではでない。

日本が好きという人は「まあ好き」までいれると5割強、日本での生活を「まあ良好」までいれると8割近い。様々な期待と目的で来日した人から「充足した」という回答が得られたことになる。

日本人にして「欲しくない事」の中では「じろじろ見ないで」があげられる。今、日本には多くの外国人が在留し、外国人が珍しくない状況にあるがそれでもいまだに外国人を違う目で見ることが多いということである。「外国人をなめないで」「アジアとくに中国人を認めて」という記述がみられ、多くの外国人が在留する中でアジアからの人と欧米からの人をどこかで違った対応をしているのであろうか。日本人の「西洋に対する憧れ」は潜在意識としてあることも影響しているであろう。同じアジアの民族としてこれをどう受け止めるか、われわれ日本人にとっては課題である。留学先の日本の人間、社会や文化に興味をもつことは当然である。マジョリティである日本人が主体的、積極的にマイノリティであるアジアからの来訪者と交流することが求められているということである。

母国の文化を大切にしながら日本に在留している人々は、民族としての意識はどんな風に考えているのであろうか。「言葉・文化については日本と母国といずれも大切」という人が6割以上である。「母国の文化が大切」というのは2割弱である。

群馬県の大泉町は日系二世が人口の1割を占めている。1990年の入国管理法の改正に伴い多くの日系二世が移住してきた町の1つで、この地域の産業を支える労働者としてブラジルやペルーから家族とともにきている人たちである。ここに住むブラジル人は幼児期の子どもを養育しながら労働している人が多い。大泉町では町立や私立の保育園、幼稚園が整備され、外国人の子どもを十分に受け入れる体制ができています。しかし、町にはブラジル人が経営する託児所が20箇所余もあり、保育環境は必ずしも十分に整備されている場合ばかりではないのに、高い保育料を払っても0歳のときから預けている場合が多い。整備のゆきとどいた日本の保育所などに入所させない理由の第一は労働時間に合わせて子どもを見てくれ、食事も母国の料理を用意し1日2回か3回希望どおりに食べさせてくれる、病気の時も拒否せずに預かってくれ、場合によっては病院にも連れて行ってくれる、急に残業になっても子どもは見てもらえるなど日

本の保育所の体制とは相違があり、働く事に専念できるという事である。第二はいずれは母国のブラジルに帰り、子どもはブラジルでブラジル人として生きるということは、日本の文化や習慣を理解し身につけるより、民族特有のブラジルの文化、言語や習慣を日本にいても継続的に伝えていくことの方が大切であると考えているということである。大人たちも母国の人たちとの交流を大切にし、大泉町の中にブラジルの街を形成しているのである。日本にしながら母国の文化や習慣を大切にしているということである。同じブラジル人の多い浜松市における子どもの母国語教育についてみると「現在学校で母国語での教育を受けている」が10.5%、「学習の機会があれば」など必要と感じている人はあわせて47%で母国語教育への関心は非常に高い。ブラジル人の託児所を利用している割合は22%、母国の文化、言語をいかに子どもに伝えていくかは大きな課題となっている。ここに住む人は「当分の間日本で生活したい」「定住するつもり」をあわせると5割である。「日本に定住する場合の問題になること」は言葉という人が41%、母国語の教育を考えながら現実には日本語が必要であるということである。

日本人に対して期待していることは「積極的な国際交流」と、「心と心の交流ができる人」などである。日本人側からの国際交流のボランティアは非常に熱心に参加しているが、これに興味なく参加していない日本人の外国人に対する無関心さが大きく関与し、積極性を感じ取ってもらえないのではないだろうか。交流経験がある人は海外生活の経験がある場合は29.6%、海外生活の経験のない人は17%（都民の暮らし白書/1998年）で、外国人に馴染みがあるかどうか交流経験と関連がある。このことから外国人が望む「積極的な交流」を実現するためには日本人の意識の切り替えが必要であろう。国際交流の催しや支援に対しては反応が様々ですべてを良しとして受け入れているようにはみえない。それぞれの立場でこの催しや支援を認識し、日本の文化をそれなりに受け入れる姿勢がみられる。

国際交流の催しへの参加はどうかとみると弁論大会をはじめ交流パーティに5割以上が参加している。「今後も参加したい」「内容によっては参加する」という人が8割、これは日本人側が企画すること、提供する支援を理解し受け入れているということである。この日本人側が提供する国際交流の催しへの参加の状況は日本人の友人数と関係があるようである。友人の少ない集団はほとんどこの催しがあることすら知らない状態で参加もほとんどなく、ニュースの伝達がうまく行われていない。

外国人が求めている交流は「自分の文化を紹介したい」「ボランティア活動に参加したい」（1997年・東京都在住外国人生活実態調査）。日本人側からの交流行事には料理教室が開催され、それぞれの食文化の紹介が行われているが食以外の文化についても紹介する機会を交流の一環として組み込むこと、外国人自身がボランティアとして活動に参加する希望する人々に機会を提供するのも交流活動として積極的に取り入れていきたいものである。

* 自由記述についてみると

多くの人が日本の物価高を指摘し、それに見合う収入が伴わず、苦しんでいる人が多い。物価の高い日本の経済状況は彼らには大きな負担となっている。勉学、研究を十分に進めるには

生活費の確保は重要な要件である。とくに深刻なのは留学生の約9割を占めるのはアジアの国々からの留学生で、アルバイトの内容は欧米の出身者とは明らかに相違があり、欧米からの留学生は英会話講師など効率のいい収入を得られるものが多く求人も多い。このような効率のいいアルバイトはなかなか得ることができない。

1999年5月現在、在日中の留学生は約5万6000人、このうち8割強が私費留学生である。このうち7割の学生がアルバイトで月に6万円余りを稼ぎ、生活にあてている（1999年11月・日本国際教育協会の調査）という。「勉強するつもりだったのに、お金どんどんなくなりました。ちょっと後悔しています」というがいい点も多いという中国から電子工学を専攻、留学してきた学生もいる。

留学生を対象としたアルバイトの求人は極めて少なく、ほとんどない状態である。東京学生相談所によると、紹介があるのは企業に頼んで留学生枠を設けてもらっている状態という（朝日新聞・2000年9月10日）。多くの留学生を受け入れる方針を打ち出している政府は私費留学生に対し、学費の減免助成金を出しており、各大学ではこれにもれた学生に対し、大学独自に奨学金を出している。

「物価は高いが物は豊富」、しかし、「精神的に貧しい」「物価は高いが安定し、治安がいい」「あまり不便なことはない」「たくさんの友人ができた」日本での生活を総括するとこのようになるということである。物価の高いのは先に述べたとおりであるが、物が豊富で治安も安定しているが心の貧しさが理解できないということである。心が貧しいのは文化、民族、生活習慣の相違からきていることも多い。異文化に関する知識の蓄積だけでは異文化を理解し、その社会に適応することはできない。異文化に直接接触することにより、適応した行動がうまれてくるのではないだろうか。異文化接触から起こる自国文化とのズレをどう理解するかは自分の基本的な価値観、主体性がこの接触体験から異文化を理解し、体験を通してこの相異を受け止めていくのであろう。人間形成は国家よりもむしろ文化が基底であると考えられ、国や民族を超えて互いに理解されていくものである。そして必ずしも理解できなくともその相異を認め合い、尊重することにより異なる民族がともに生きることが可能になる。これは文化、民族、国の差異の問題だけではなく、世代間理解、性の違い、障害の有無等に対することと同様であると考えられる。

東京都生活文化局の「都民暮らし白書」（1998年）によると「物価が高い」ことに不満が集中しているがアジア系住民からは「仕事が見つけない」、北米・ヨーロッパの出身者からは「住宅環境が悪い」をあげられている。出身地域により不満の点に相異がある。

「日本人の友人がいない人の場合」と「友人が20人以上（多数）いる場合」のそれぞれの記述をあげてその内容を検討してみることとした。

＊「日本人の友人が少ない20代・男性の場合」

「あなたは日本が好きですか」に対して

・日本人は島国根性

- ・物価が高すぎる
- ・日本人はやさしいが好きになれない
- ・日本はいい社会システムである

「あなたの日本での生活はいかがですか」については

- ・お金がたりない
- ・アルバイト先の日本人がきつすぎる
- ・駅売店の人たちはとても不親切
- ・住宅を借りるのに外国人だからと断られる、不法滞在者ではないので貸して欲しい
- ・時間とともに日本、日本人の印象が悪くなる、表と裏があるのが気になる
- ・もっと人間的な社会になって欲しい環境は住みやすいが外国人としては厳しい面がある

いずれの記述も否定的な要素があり、日本に滞在していてそれほど愉快ではないようにみえる。日本での生活を快適にしているかどうかを左右する点として日本人とどのように交流があるか、友人の人数により自由記述の内容は異なり、日本での生活に差があることがみえてきた。日本人との交流の有無を聞くと「よくある」という人が4割を越えている。

「日本人の友人が1—5人」であると回答している人が40.1%おり最も多い。「日本人の友人が10人以内」が26.9%で、「20人以内」は15.2%、21人以上は14.2%である。この友人数が日本での生活が充足され、日本を好きになるかどうかの鍵になるのではないかと考える。友人数により日本の捉え方に相違あるのではないかと推定しこれを検討する事にした。

日本人の友人が少ない人たちの日本における生活は日本に馴染む機会が少ないこと、日本人との信頼感がなかなか生まれてこない状態であることから、問題はやはり人間関係を含めた社会環境、物価についてが中心である。言語によるコミュニケーションが不完全であることも大きく影響している。単一の民族という意識の強い日本人が多数の違う民族を迎え入れる心やその意識をもつことができるようになるにはかなりの時間を要するであろう。外国人の入国が増加しはじめてからすでに10年余りを経ているが、一般的にはここにもでていたような住宅の契約、人としての心の交流が場合によってはなめらかに動いていないことが多々あるようである。

「あなたは日本と日本人になにを期待しますか」をみると、「期待しない」と一言でいいきる人が多い。友人の多い人の場合は「話し相手」として48%強が期待しており、日本での生活の状況に大きく相違があり、日本そのものを理解することが不十分であると思われる。

「役所・役場などの相談窓口に行ったことがありますか」をみると

- ・相談窓口があることを知らなかった
- ・あまり利用しない

各区では広報の記述を日本語以外でも表示し、情報の伝達に力をいれているが、これが十分に効果がでていないことになる。友人が少ないという事がすべての原因ではないであろうが入る情報が非常に少ないことは予想できる。

「国際交流の催しに参加したことがありますか」

- ・情報がない
- ・時間がない
- ・仕事が忙しい
- ・時間が合わない

友人が多いグループの催しへの参加の割合は57.6%，友人の少ないグループの参加は30.5%である。友人数の少ない集団は催しがあることも知らないし，参加する意思をほとんど持たないことなどである。また，参加できない理由は情報がないことや参加する時間の余裕ないことなどの問題がでているが，参加することにより得られるであろう情報を手に入れることなく，また交流を体験することができないことは残念である。日本人の国際交流活動が多く の在日外国人を対象に企画され，支援できるような工夫をしているが，これが十分に受け入れられていない実態をわれわれはどのように捉えたいだろうか。彼らが本当に望んでいる企画や支援がなんであるかを再考することからはじめなければならない。

「今，一番困っていることはなんですか」

- ・いっぱいある
- ・お金が足りない
- ・進学のこと
- ・アルバイト先や部屋を探したいが大変難しい
- ・日本についてもっと多くのことを知りたいが機会がない
- ・アルバイトで進学先探しの時間がとれない。
- ・日本にいても日本人と話す機会がない。日本人と関係ない生活である
- ・日本人と話がしたい
- ・外国人を蔑視しているようだ

在日中の外国人の最も大きな問題の第一は経済的問題である。とくに私費で留学している学生は物価の違う日本での生活を維持するためには相当の時間をアルバイトに費やし，勉強や研究の時間が割かれている状態である。その結果，日本人の友人と出会う機会は極端に少なく，日本にいながら日本人と関係のない心の通じない生活になる。アルバイトや住宅を探すときの支援もなかなか得られない事になる。

＊「日本人の友人の少ない20代・女性の場合」

「あなたは日本が好きですか」

- ・勉強のチャンスがあり，生活は便利
- ・生活費が高い
- ・新しい文化に接することができる

「あなたの日本での生活はいかがですか」

- ・物価がとても高い

- ・日本語がまだ上手に話せず日本人との交流がしにくい
- ・アルバイトを探すのが難しい

「あなたは日本と日本人になにを期待していますか」

- ・本当の友達
- ・進学情報の入手

「あなたが日本人にして欲しくないこと」

- ・心にもないことを話さないで

「今、一番困っていることはなんですか」

- ・物価が高く、いつもお金が足りず心配
- ・進学先、アルバイト先を巧く探せない
- ・日本語が難しく、わからない
- ・母国と離れて淋しい
- ・アルバイトの内容がよくない
- ・子どもの母国語の実力が不足する

日本人の友人が少ない男性、女性とも日本での生活を通して考えていること、希望していることは共通している。経済的問題、アルバイトなど仕事のこと、日本語の習得などである。女性立場からみる「本当の友達」という希望をみるとわれわれの外国人との交流態度がどうあるかをみるべきである。個々人によりその内容は異なるのは当然であるが、日本人が心を開いていかなければならない。とくに日本語を十分に習得していないことが友人ができないこと、日常的にいい人間関係がつかれないことなどが日常生活の範囲を狭くしていると思われる。これらの個々の問題について日本側の国際交流活動でどれだけ支援し解決の方向に向かう事ができるであろうか。

＊「日本人の友人が20人以上（多数）いる場合」

男性の場合

「あなたは日本が好きですか」

- ・便利
- ・日本人は礼儀正しい
- ・言葉であらわせない
- ・しっかりした国だ
- ・物は裕福だが精神的には貧しい
- ・日本にくるのが夢だった
- ・やりたいことができる
- ・ルールをよく守る
- ・環境がいい
- ・交通が便利

女性の場合

- ・日本人のマナーがすごく悪い、人の足を踏んでも体を押しても一言も謝らない、駅で喧嘩をしている
- ・親切な人もいるが外国人が嫌いな人もいる
- ・安全で楽しい
- ・日本語が大好きだから
- ・文化・習慣の違いで母国が恋しい
- ・親切
- ・便利

「あなたの日本での生活はいかがですか」

- ・ 便利
- ・ 大きな友達がたくさんできた
- ・ 物価が高い
- ・ 自由である
- ・ 奨学金をもらって勉強に集中できる
- ・ 視野が広くなり経済も豊かになった
- ・ チャンスがあれば他の国にも行ってみたい
- ・ 自分のやりたいことができる
- ・ 友達がたくさんできた

「日本や日本人にどんなことを期待しますか」

- ・ 心と心の交流ができる人になって欲しい
- ・ いっしょに学び遊ぶこと
- ・ できるだけ援助を

「日本人にして欲しくない事」

- ・ 外国人をなめないで
- ・ アジアとくに中国出身の人と仲良くなって欲しい
- ・ 第三世界の人に対する偏見がある
- ・ 納豆を食べさせる事
- ・ アジア系の人を見下すこと
- ・ 看板・食物の表示がほとんど漢字で困る

「今、一番困っている事」

- ・ 勉強
- ・ お金がない
- ・ 淋しい
- ・ 分かってくれる人がいない
- ・ 就職活動が大変
- ・ 日本人の社会は外国人をほとんど採用しない
- ・ 口ではいいこと言っているが、行くとあまりいい顔をしない
- ・ アルバイト先で金銭トラブルに助けてくれる人がいない
- ・ 私費留学生にとって生活が厳しい
- ・ 物価高とアルバイト不足
- ・ 1年の経費が母国にいる両親の一生の収入を上回るほどだからせめてアルバイトの機会を与えて欲しい
- ・ アルバイトで外国人を雇わないところが多い、なんとかして
- ・ 日本語能力試験のこと
- ・ 精神的に余裕がないこと
- ・ 英語がうまく話せないこと
- ・ 日本国内を旅行したいが時間とお金がない
- ・ アルバイトで心身ともにつかれている
- ・ 大学院生試験のこと
- ・ 日本の文化・食するとき、話するとき、お年よりに対するときなどマナーが多くいつも気をつけなければならない
- ・ ベジタリアンの食事は大きなレストランでしか食べられない上、値段が高い
- ・ 日本の教育費は高い上に学校の授業内容が期待できないので、子どもの教育は母国の両親のもとときめた

「国際交流の催し参加したことがありますか」

- ・お互いの文化を理解できる
- ・友人ができる
- ・視野が広がる

日本人の友人が多い場合、男女ともに日本に住んでいることについて積極的であり、ものごとくに前向きで向きあっている様子がみえる。とくに日本人側が主催する国際交流の催しへの参加の姿勢は積極的であり、参加することを楽しんでいる。これは友人の少ない集団とは大きな違いである。アルバイトが思うようにいかない等友人数の少ない集団と同様の見方をしている面もある。

「自分のやりたいことができる」「環境がいい」など快適に生活している反面、「アジア人と仲良くして」「物は裕福だが精神は乏しい」など日本人に対する要望も鋭い。

在留外国人に対する調査は東京都を始め各区においても行われ、今回の調査と同様の記述はでており、それに対応する政策がそれぞれに出されている。「差別を受けた経験」「制度的な不平等を感じること」「意見や提案・要望」をみると外国人を受け入れたら外国人との対話を考え政策作りと国民の啓発の必要性を要望している。外国人というだけでなくアジア系住民に対する差別については日常の生活にも出ていることから今後の政策にこれがどのように反映するかが課題である。

4 日本人の国際交流の支援体験者に対する調査と結果

外国人が急増し市町村には国際交流に関連する部署がつくられ、外国人に対する公的サービスをはじめた。今、経済社会の変化にともない、これらの部署の撤退も始まっている。国際交流協会もあり、交流パーティ、お祭り、日本語など語学教室、日本語弁論大会、料理教室、小旅行等を開催し、外国人と市民との交流を図ってきた。これらの行事に対する外国人の受け止め方は「お互いの文化が理解できる」「友人ができる」「視野が広がる」など積極的である。交流行事がマンネリ化してきたこのごろ、これに参加して活動している人たちは新しいものを取り入れる努力をしている。国際交流のボランティアをしている人はどんな人たちであろうか。また外国人に対し、どのように考えているかを調査してみるとした。

1 対象

男性＝42名（20歳代以下：14.3%，30歳代：30.9%，40歳代：9.5%，50歳代：33.3%，60歳代以上：11.9%）

女性＝59名（20歳代以下：8.4%，30歳代：8.4%，40歳代：25.4%，50歳代：45.8%，60歳代以下：11.9%）

2 職業

男性＝常勤労働者：14.2%，非常勤労働者：16.7%，自営業：4.8%，学生：4.8%，家事専業：38.1%，その他：21.4%

女性＝常勤労働者：18.6%，非常勤労働者：28.8%，自営業：6.8%，学生：3.2%，
家事専業：23.7%，その他：18.6%

調査の対象者は東京と埼玉で活動しており，男性，女性とも50歳代が最も多い．職業は非常勤労働者，家事専業者である．青年層のボランティアが予想より少ない事が意外であった．

3 外国での経験

住んでいた 29.0%（仕事，留学，家族として，）
旅行した 65.6%（男13，女48）
行ったことがない 5.3%

4 外国という思い浮かべる国（5つ以内）

男性＝アメリカ・イギリス，中国，フランス，韓国，イタリア・ドイツ・
ニュージーランド・フィリッピン・台湾・ロシア
女性＝アメリカ，イギリス，中国，フランス，イタリア，ドイツ，オーストラリア，
カナダ，ニュージーランド，韓国

ボランティア達の外国での経験は旅行で訪れた人たちが多く，住んだ経験のある人を上回っている．一度も行った経験のない人もおり外国を知らなくてもボランティアはできるのである．

ボランティア達が思い浮かべる国はまずアメリカ，イギリスであった．中国人からは「中国を認めて」というほどに中国は無関心な国ではなく，ボランティアが思い浮かべる国の1番目から10番目の国の中で女性の場合，3番目が中国，10番目が韓国．男性の場合，3番目が中国，5番目が韓国，10番目が台湾，男性と女性とはあげた国がいささか違いがある．男性，女性とも思い浮かべる国の中にアジアが少ないのは日本人の欧米諸国への思いの強さ＝外国人コンプレックス（白人崇拜）の表れか，これは不明である．

5 国際交流活動ではどんなことをしているか

男性＝雇用主，共同で仕事する，ホーム・ステイ受け入れ，パーティ（主催，参加）
ボランティア（支援），日本語を教える
女性＝雇用主，家主，共同で仕事，ホーム・ステイ受け入れ，パーティ（主催，参加）
ボランティアで世話

国際交流では男性，女性ともホーム・ステイ受け入れ，パーティの主催・参加がほとんどである．ホーム・ステイの受け入れは外国人に対する理解があること，同居する家族の協力，家の広さ，世話をする人がいることなどいくつかの条件がそろうことにより可能である．支援をするグループが主催する各種のパーティは交流を進める上で重要な仕事である．

6 外国人とどんなところで知り合いましたか

男性＝職場，交流パーティ，ボランティアグループ集まり，学校，友人の友人，その他
（旅行で，外国で，会話教室など）
女性＝ボランティア・グループ，交流パーティ，職場，子ども通して，友人の友人，隣近

所, 教会, その他

7 同居の家族はあなたの国際交流活動をどうみていますか

男性=協力的 44.5%, (妻, 子, 父, 母, 幼児)

無関心 55.5%, (母, 父, 子, 兄弟)

女性=協力的 76.4%, (夫, 子, 母, 父,)

反対 3.2%, (父, 母, 子)

無関心 20.4%, (夫, 子, 母, 父,)

男性が交流活動をするとき家族が反対ではないが無関心であるという割合が5割を超えているが, 女性の場合は協力的家族が7割を超え, 交流活動はやりやすい環境にいることになる。家族の信頼や協力を得ればその活動は充実したものになるであろう。

8 これからも国際交流活動を続けていきたいと思うか

男性=続ける 70%, 場合によっては 30%, もうしたくない: 0

女性=続ける 84.7%, 場合によっては 13.6%, もうしたくない: 1.7%

理由: 男性=・楽しい・視野を広げる

- ・いろいろな文化や習慣を理解できる
- ・自己啓発
- ・見識を広げることができる
- ・国際人として
- ・日常生活の一部

女性=・広い意味で地球人として楽しい経験

- ・自己啓発
- ・視野広がる
- ・日本のよいところを理解してもらう
- ・様々な国の友人ができる

9 あなたは外国人にどのようなことを期待しますか

男性=・いろいろなことで視野を広げたい

- ・仲良くしたい
- ・英会話の相手をして
- ・期待しない
- ・地域に溶け込んで欲しい
- ・相互の理解を深める

女性=・視野を広げたい

- ・仲良くしたい
- ・英会話の相手をして欲しい
- ・日本の文化を知って欲しい

日本に在住する外国人が日本人に望むことは「話し相手」をして欲しいことがこの調査ではでているが, 東京都の「都民の暮らし白書」では外国人が求めている事は「隣近所の人と親しくしたい」「日本の習慣などを教えてもらいたい」をあげているが, 交流活動をしている日本人

は「英会話の相手になって欲しい」と考えている人が多い。日本人以外の人と交流する事により、視野を世界に広げ、日本文化を理解してくれる事を願い、その仕事を目標としている。

10 外国人にして欲しくないこと

男性＝・大声で騒ぐ

- ・ごみなどの生活ルール破り
- ・殺人・泥棒など犯罪一般
- ・文化習慣に反する事
- ・人の家に土足で上がらないで
- ・不当行為不法滞在

女性＝・ごみなどルール破り

- ・大声で騒ぐ
- ・社会秩序を乱すこと
- ・時間を守らない
- ・日本人を外面だけで判断すること
- ・マナーを守って

日本で生活する外国人に対しては日本の文化、習慣に沿って生活することを希望している。たとえ外国に住んでも民族特有の文化は大切ではあるが、周囲の状況に合わせて生活することを望む人が多い。外国人が居住する地域で問題となるごみ出し、大声で騒ぐパーティなど日本人としてはとても容認できないことも彼らの文化であり、パーティを開いてにぎやかに騒ぐ事も生活の一部である。交流活動が続ける中で異文化をどのように取り込んでいくかも課題としたい。

11 外国人が母国の文化・言葉を大切にすることをどう思うか

男性＝・当然のこと

- ・私たちに影響なければ問題ない
- ・郷に入っては郷に従えて日本にあわせて欲しい
- ・両方の文化を生かして欲しい

女性＝・当然のこと

- ・影響なければ問題ない
- ・郷に入っては郷に従えて日本に合わせて欲しい

「郷にいつては郷に従え」という意見が強いが彼らには従えない面もあるのである。それぞれの生活スタイルがあり、異国にしようとも彼らの生活をかれらの文化で遂行し、日本での生活をより楽しいものに行しているのである。大声で騒ぐにぎやかなパーティは新しい友人を迎えるための日常的なもので、彼らには必要な生活スタイルの1つである。

12 国際交流活動をしていて良かった事

男性＝・新しい視野が開けた

- ・友人が増えた
- ・お互いの文化を理解することができる。
- ・外国人，日本人関係なく人間ひとり，ひとり違うことが理解できた
- ・マスコミを通してでなく直接話を聞くと考えていたのと逆のこともあり，面白く，勉強になる
- ・地域の人に喜ばれる

女性＝・視野が深まり友人が増えた

- ・日本人の良い面，悪い面も見えてきた
- ・世界中の生の情報を入手できる
- ・いろいろな見方ができ，知識が深まる文化や考え方の違いを知ることで，互いに認め合うことの大切さを互いに知った
- ・様々な文化，料理，言葉を知った
- ・世界が身近に感じられ，普段の出会いと違う出会いがありたくさんの人と逢えた
- ・物差しの違う人々との交流から得られる奇妙な達成感
- ・同じ年代の日本人と考え方に相違がありしっかりしているので自己啓発になった
- ・日本の文化を見直す機会，日本再発見

13 国際交流活動をしていて困ったこと

男性＝・外国語が十分に話せないこと

- ・外国人は日本に来るという自覚を持って言葉を使おう，覚えようという姿勢に欠けているように思う
- ・表現力，説得力，自己主張など日本的曖昧さがでて相手に分かりにくくなる
- ・違うことは分かっているけど理解することは難しい
- ・勝手にいなくなったりする

女性＝・外国人に慣れて新鮮な感覚が失われてしまった

- ・ホーム・シックで泣かれたこと
- ・就職を依頼されあてがなく困った
- ・伝えたいことが巧く伝わらないとき
- ・金銭的に困っているときの援助の仕方
- ・家族の協力を得るのが辛いとき
- ・日本へくるのだという自覚がない（その国の言葉を使おうとする努力・姿勢など）
- ・自分の意見を押し通そうとする強さに難しさがある
- ・日本人にありがちな外国人コンプレックス（白人にやさしい）が自分にあることに気づいた
- ・留学生の親の訪日の保証人を頼まれたり，仕事紹介を頼まれたり，入管に呼び出

されたりしたとき

- ・宗教の関係で食べ物に気をつけないといけないとき
- ・どこまで真剣に向き合ったらいいかわからないとき

外国人に対する支援活動に関する調査は豊島区が町会役員、民生委員、児童委員、商店会会長などを対象に平成7年3月に実施している。これらの人々が積極的に支援活動を繰り広げる事を期待しているのである。われわれの調査の対象者は個人の立場で自ら交流活動に参加している人々である。公的な立場で行う支援とは基本的に心構えに違いがあり、自由記述にもそれは表れ公的機関による支援を主体的に考える傾向がみえる。自発的に国際交流の活動に参加している人は新しい視野が開けたと自覚した、日本人のいい面、悪い面が見えた、日本の文化を見直し、日本人、外国人それぞれに個性がありひとりひとり違うということを確認し、表現の方法、主体性など日本の曖昧さが十分に相手に理解されない原因であることなど自分発見、日本発見の機会となっている。

活動を展開するにあたり障害になったのは外国語が十分に話すことができないことを挙げている。外国人も日本語を十分に話せず、相手のいうことを理解できないで日本人の友人関係が成り立たず、在留生活の充足度の低い場合があることが今回の調査でもでている。一方で言葉は交流活動に支障ないという見方もある。身振り、手振りで十分にコミュニケーションが成立するというのである。交流活動に参加しているのは50歳代の男女が最も多く、外国語が十分でない場合もある年代である。言葉に関係なくこの交流活動に参加しているということになる。

活動を積極的にしなやかに継続する上で家族の協力は不可欠であるが、うまく協力を得られない事があり、活動を制限されるという戸惑いがみえる。日本全体が外国人をさりげなく受け入れ、多文化共生の社会になるにはまだまだ時間がかかるものと思われる。

日本人に多くみられる「外国人コンプレックス—白人にやさしい—」に気づいている人もいる。外国人からも「アジアの人をなめないで」という記述がみられ、日本社会での疎外感、被差別感を強く感じている人が多い。アジア系の住民が増加する中で彼らとどのように生きるかを認識しなければならないと地域社会で考えはじめて10年を経過してきている。日本人が意識せずにもっているこのコンプレックスはどこからうまれてくるのであろうか。日本はアジア地域に存在する国であるが、心の内ではアジアには存在していないのではないだろうか。日本は明治以降、欧米の近代工業をいち早く取り入れ、見事な発展をとげ、つねにアジア諸国の経済、文化をリードしてきた国である。アジアに存在しながら欧米諸国と同様の世界での存在意識がわれわれ国民の中にも浸透しているのである。日本人の中にある「西洋に対するあこがれ」「西洋に学ばねば文明国になり得ないという発想」によるものであろうか。しかし、在留する外国人の80%以上がアジアからの来訪者である。最も在留者の多い東京の場合、中国、韓国、台湾などアジア地域からが66%、フィリピン、イランなど他のアジアの国からは15%、ヨーロッパ、アメリカを合わせて19%、ブラジル、ペルーなど中南米からが5.2%である（1997年・東京都在住外国人生活実態調査）。今後、日本に在留する外国人はさらに増加するで

あろう。確かに文化の相違は多いが、日本の文化を押し付けるばかりでなく、外国の文化を学び民族的習慣を理解しともに生きる方が豊かな生き方ができるのではないだろうか。われわれは多くの外国人とともに生きる社会を構築するために両者の立場を十分に認識していきたい。

おわりに

日本に在留する外国人の生活実態、生活意識はどのようなものか、日本や日本人にどんなことを期待しているか、また、日本人側が発信する交流活動をどのように受け止めているか、自発的に国際交流活動に参加している日本人は外来者をどのように受け入れ彼らになにを、期待をしているのかをみることにした。とくに交流活動に自主的に参加する人とこの支援活動を受ける側の在留者を同時に調査の対象とした。

調査の対象の留学生が日本人に期待していることは「話し相手」で、これは日本での生活を豊かにし日本に馴染み、日本人の友人を得ることにつながることになる。友人がいるかどうかは様々な情報の入手、生活の広がり、日本文化の理解、交流活動への参加状況に表れている。友人が少ない場合、在留生活は消極的で日本の文化や習慣に対しても否定的に受け取ることが目立ち、交流行事への参加は時間がない、情報がないなどで極めて少ない。友人ができない主な原因は日本語の理解度が十分でないことであり、言葉が通じないことはコミュニケーションの不足となり、活動の範囲をせばめるという結果になっている。友人数の多い人は日本に住むことに積極的であり、快適に生活している。交流行事への参加の機会も多く、日本人との交流を通して日本の文化を理解している。また、在留者自身も交流活動ボランティアとしての参加、自国の文化を伝えたいという希望をもっている。在留者が日本人にして欲しくない事は「外国人をなめないで」「心にもないことを言わないで」など人格に関わる表現で相手を傷つけている面があるようである。これからさらに多くの外国人が入国してくるであろうというとき、民族の壁を越えてともに生きることを目指し、その方法について考えていかなければならない。

日本人が外国人に「英会話の相手」を期待が多いのは西洋に対する憧れの表れの1つであり、在留する外国人が英語を話すことを前提にしているようにみえる。自主的に交流活動に参加している彼らは日本の文化を知ってもらいたいこと、外国の文化に触れること、視野が広がることなどを目標にしている。外国人にして欲しくないことは「生活のルールを守って貰いたい」「大声で騒がないで」などであるが、これらは外国人にとっては自国の文化であり、生活の一部であることを日本人は理解しなければならないであろう。

一般的に交流をしている人の場合「会えば挨拶をする程度」がほとんどであるが、自発的に交流活動に参加している場合の内容は積極的に深く外国人と接しており、増え続ける外国人とともに生きる国際コミュニティを構築するための一翼となっているようである。

参考文献・資料

- 江渕一公編著 「トランスカルチャリズムの研究」 明石書店 1998年
- 中島智子編著 「多文化教育」 明石書店 1988年
- 曾和信一 「人権問題と多文化社会」 明石書店 1996年
- 駒井 洋他編 「超過滞在外国人と在留特別許可」 明石書店 2000年
- 浜松市 「外国人の生活実態意識調査」 2000年
- 豊島区社会福祉協議会 「社会福祉協議会と福祉のまちづくり及び在住外国人に対する支援活動」
1995年
- 豊島区 「外国人相談にみる豊島区の国際化」 1992年
- 豊島区社会福祉協議会 「地域福祉活動計画・区民による区民のための豊かなまちづくり」
1999年
- 異文化間教育学会 「異文化間教育学会創立20周年記念シンポジウム」 2000年
- 東京都 「東京都在住外国人生活実態調査」 1997年
- 東京都 「暮らしの国際化と消費生活・都民の暮らし白書」 1998年
- 東京都政策報道室 「21世紀の東京街づくりに関する世論調査」 1996年
- 川村千鶴子 「多民族共生の街・新宿の底力」 明石書店 1998年